

責任編集 松田道雄「貝原益軒」中公バックス、日本の名著 14、中央公論社 1973年11月10日刊
を読む

楽訓

—読書—

1. 読書の楽しみ

- (1) およそ読書の楽しみとは、色を好まなくてもよろこび深く、山林に入らなくても心のどかに、富貴でなくても心ゆたかになることである。
- (2) 人間の楽しみでこれにかわるものはない。天地・陰陽をもって道の法とし、古今天下をもって心を遊ばせる世界として、そのおもしろさは至って大、かぎりなくひろい。
- (3) 一日書を読んでいる楽しみは最高である。
- (4) 聖賢の書を読んで、その心を得て楽しむのは楽しみ^{じんむ}の極致である。
- (5) そのつぎに昔のことを書いた歴史には、わが国では神武天皇より今年まで二三七〇年、中国では黄帝より今まで四四〇〇年の間のことがのっている。
- (6) だから中国と日本の歴史を見ると、遠いいにしえのあとが目のあたりに明らかに見えて、自分がその当時に生きていた心地がし、数千年の長生きをしたようだ。
- (7) この楽しみもまた大きい。目前のことだけを見て、昔の文章を知らないのは、ひどくかたよったことである。
- (8) 「人古今に通ぜざるは、馬牛にして襟裾^{きんきよ}（着物を着ること）す」と韓退之^{かんたいし}（韓愈、唐の文章家）もいっている。
- (9) 古い書を見ず、いにしえの道を知らない人は万事理に暗く、いろいろのことを知らない。
- (10) まだ夢がさめないもののように迷って一生を過ごす。これは大きな不幸である。
- (11) およそ古今の書に通じて、理をきわめ、事を知っていると、見ること聞くこと万物の理に疑いがなく心のうちは大いに楽しい。
- (12) いにしえの書を知らないと、中国のことも日本のことも、古今天地のうちに満ち満ちている理も事もみなわからないといえよう。

2. 才学の人^は貧しい

- (1) 私などが経書や史書にかかわりをもつようになったのは、縁が深かったのであろうか。
- (2) 書にむかうと、いつとなく、このうえなく楽しく思われるのは、天から幸福を恵みくだされたのである。
- (3) およそ天がものをつくることで、二つとも完全というのではない。
- (4) あちらもこちらも足りているのはまれである。
- (5) だから、こちらを得ればむこうを失う。
- (6) たとえば、花が美しいと実がよくないし、実がよいと花が美しくないようなものだ。
- (7) 千の花弁のある花には実がならない。
- (8) だから、才学のある人は多くは貧しい。
- (9) 才学があつてまた富貴なら、二つとも足りた幸いである。
- (10) これは得がたいのが理であるから、こういう人は世にめったにいないだろう。

- (11)才学のある人が富んで貴く、幸いがならぶというのは、天が惜しまれるところだから、むずかしいことだ。
- (12)また天がこういう人を貧賤にして苦しめ給うのは、その人によってその徳を玉にしようとされているのだという理もあるだろう。
- (13)才学という幸いがあったら、貧賤で運が向いてこないことを悲しんではいけない。
- (14)私などが、こういう愚かな心で、もし富貴でさかんにおごり、怠るのが習慣になったら、学問をきらい、道に志がなく、楽しみがなかつただろう。
- (15)だから、みずから貧にあまんじて、富貴をうらやんではならぬ。

3. 六つの助け

- (1)書を読み字をうつすのに、明るい窓、清潔な机、筆硯・紙・墨の質のいいのを得て使えるのも人生の一つの幸いである。
- (2)この楽しみを得るものは少ないと蘇子美（蘇舜欽、宋の詩人）がいったのも、書生には貧しい人が多いから、そういったのだろう。
- (3)また貧しい人には灯がない。
- (4)昔は雪で照らし、螢を集め、壁に穴をあけて書を読んだ人さえあるのに、今この六つの助けを得、また燈火にやや親しめる人は、幸いだと思って努めて書を読まないといけない。
- (5)ある人のいったことに、聖賢の書を一人の師とし、筆・硯・紙・墨と机とを五人の友とし、あけくれこれに交わるのは益があつて楽しいと。
- (6)また、燈火が暗い所を照らし、日光についで明るく本が読めるのはよい賜である。

4. 書を読むのには

- (1)書を読むのには時を惜しまないといけない。
- (2)しかし、昼間は用が多くてはかがゆかぬ。
- (3)夜は静かで、昔を考える楽しみが多い。
- (4)この時を失っていたらずらに寝て過ごすのは惜しいことである。

5. 詩歌を読む

- (1)四季につれて月花を鑑賞し、おりおりの景色を愛し、季節にかなった漢詩や和歌を声をあげて読み、心に楽しむのは、自分でつくる苦勞がなく、たやすくてももしろいことだ。
- (2)中国の昔に、才のゆたかな人がいたが、客に季節にかなった古い詩をあれこれ引いて、その氣持をのべた例が左氏の書（『春秋左氏伝』）に多くのっている。
- (3)これは自分がつくるのより古めかしく理もまさり、人を感じさせることが深かつたからであろうか。
- (4)いにしえのことは、手本とすべきである。
- (5)私などがつたない言葉で、なまじつか不用なことをいいだして、自分でいいと思つていても、詩歌を知っている人に見られたらはずかしいもので、顔之推のいった論痴符（おろかな売文）のそしりをまぬがれにくいだろう。
- (6)私なども才がつたなく、言葉をたくみにしようとする苦勞はわずらわしい。
- (7)天才のある人がたやすくつくりだすのはおもしろいことだろう。
- (8)しかし五字の句をうまくつくるために、一生の心をつかいへらすのは無益である。

6. 読書の益

- (1) だいたいこのことは友を得ないとできない。ただ読書の一事は、友がなくてもひとりで楽しめる。
- (2) 一室にいながら天下四海のうちを見、天地万物の理を知る。
- (3) 数千年ののちにいながら、数千年の前を見る。
- (4) 今の世にあつて古人にむかいあう。
- (5) わが身は愚かなのに聖賢に交わる。
- (6) これみな読書の楽しみである。
- (7) およそ万事のすることのなかで、読書の益にまさるものはない。
- (8) それなのに世の人はこれを好まない。
- (9) その不幸ははなはだしい。
- (10) これを好む人は天下の至楽を得たといえよう。

P268 ~ 271

<コメント>

「楽訓」、清福の考えの下で人生を楽しみながら充実させるために「読書」ほど大切なものはない。読書の大切さをこれほどわかりやすく教えてくださる作品は余りありません。

2021年10月27日(水) 林明夫